

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 9 月 20 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 久末 正晴 職位： 教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト(必修，選択)（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。

1. 獣医療倫理・動物福祉学（コーディネーター）

伴侶動物の獣医療と獣医倫理について担当しており、インフォームド・コンセントおよび診療後の飼育指導の重要性、伴侶動物の診療における動物と飼い主への対応、伴侶動物の獣医療と獣医倫理、終末期獣医療における獣医倫理上の対応、伴侶動物と飼い主等との生別や死別に対応する場合の獣医倫理上の配慮について講義した。

2. 臨床病理学（分担）

白血球系の検査、血漿(清)蛋白検査、全身性免疫介在性疾患(皮膚疾患を除く)、遺伝性疾患、腫瘍・感染症などの新しい診断検査(小動物)について講義を担当した。

3. 獣医内科学（コーディネーター）

一般的な診療の進め方、医療面接、獣医療に於ける説明と同意、身体検査、診療記録、全身的な臨床兆候を呈する疾患、腎泌尿器疾患の臨床兆候と検査法、代表的な腎泌尿器疾患について講義した。

4. 小動物獣医総合臨床（分担）

呼吸循環器病学は、上部気道疾患、気管と気管支の疾患、肺の疾患、胸腔と縦隔の疾患、血液免疫病学は、造血機構と血液・免疫系疾患の検査、ワクチン、血液免疫病学では白血球増加症と白血球減少症、免疫介在性血液疾患、白血病と骨髄異形性症候群について講義した。

5. 小動物臨床実習（分担）

血液内科、肝臓病、免疫介在性疾患および他の疾患について診療を行い、症例を通じて学生に参加型臨床実習を実践している。

6. 小動物病院実習（分担）

血液内科を中心に学生に実習を実施した。

7. 獣医内科学実習（分担）

血液塗抹作製、採血、血球鑑別、投薬、輸液療法、医療面接に関する実習を行った。

8. 基礎・小動物総合臨床（分担）

小動物の血液内科の分野の貧血と赤血球増加症、白血球増加症と白血球減少症、止血異常と血栓症について講義した。

※分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外）

※分量（字数）はあくまで目安ですので、超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
1 獣医療倫理・動物福祉学	獣医学科	必	2	136
2 臨床病理学	獣医学科	必	4	149
3 獣医内科学	獣医学科	必	4	128
4 小動物獣医総合臨床	獣医学科	必	5	150
5 小動物臨床実習	獣医学科	必	5	150
6 小動物病院実習	獣医学科	選	6	なし
7 獣医内科学実習	獣医学科	必	5	150
8 基礎・小動物総合臨床	獣医学科	必	5	150

2. 教育の理念（育てたい学生像、あり方、信念）

私が育てたい学生は、高いコミュニケーション能力、倫理観と教養を備え、豊富な知識と経験をもとに獣医師として社会に貢献できる人物である。また、教育のあり方として学生一人一人の目標や人生観を尊重し、ご本人が目指すものをしっかりサポートしてあげ一度しかない人生を悔いなく過ごし、目標を達成できるための知識・手法を惜しげなく伝えたい。信念としては、過去の実績や常識に囚われることなく、これからの新しい時代の中で社会環境やシステムの変化に柔軟に対応できる思考を学生が身につくようにしたい。

なぜやっているのか：これからの人口減とペット飼育数の減少で生き残りをかけた時代を迎える社会情勢の中、小動物獣医療は社会的地位向上とペット飼育のニーズを確保する必要がある。そのためには、高いコミュニケーション能力と倫理観を持ち飼い主と動物に接し、その一方で科学技術を駆使し安全で精度の高い獣医療を実践社会的地位を向上させる必要がある。

自らの信念、価値（感）：とかく失敗することがマイナス評価される日本の社会風潮であるが、革新のためには一定の失敗はやむをえない。失敗ばかりを恐れ新しいことにチャレンジしない者には、明るい未来は訪れない。勇気をもってチャレンジを繰り返し壁にぶつかれば修正と打開策を練って改善に努めることが輝かしい未来への最短手法である。これからは、①科学的エビデンスに基づいた合理的な接遇方法、②高い倫理観、③ITやAIと、経験則を融合させた精度の高い獣医療、を目指す必要がある。その姿勢は社会から大きな評価を得ると信じてやまない。

目指すもの）高い接遇能力とITやAIの活用を新時代にマッチした獣医療を創意工夫を常日頃からできる獣医療が普及すれば、獣医の社会的地位も向上する。また地球上には、ヒトも動物も等しく健康に暮らす権利がある。その鍵を握っているのは私達獣医師であることを皆が認識し獣医療の未来永劫の継承と発展に貢献したい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

アクティブラーニングについての取組

学生の積極的な授業への参加を促す授業や学習法については、一部の教科で従来の「受動的な授業・学習」から「積極的・能動的な授業・学習」への取り組みを行っています。アクティブ・ラーニングでは学生が能動的に学ぶことによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験などの汎用的能力の向上や育成を目指し、①グループ・ディスカッション、②ディベート、③グループ・ワークなどを教科によって取り入れています。以下に実例を挙げてゆきます。

1) 獣医内科学実習：医療面接実習

教育の理念で述べたように、高いコミュニケーション能力や倫理観を学生が身につけてもらうため、獣医学科の20-30名の多くの先生方にご協力いただき医療面接の実習に取り組んでいます。学生には、模擬診察を行っていただき、その際に学生を3名一組にして他者の模擬診察についてディスカッション、ディベートを積極的に行っています。また、全国初の取り組みで一般市民の方々にオンラインで実習に参加し、非学生の評価をしていただきました。この手法で、学生は自ら主体的に考え学ぶことが出来き、熱心に医療面接の理論、手法と実技を身につけています。実際に共用試験にて他大学の教員からは麻布大学の医療面接教育レベルは素晴らしいと評価されおり2022年の獣医学会においても遠隔診療に関するシンポジウムにおいて発表を行いました。

2) 小動物臨床実習

小動物臨床実習では、3名の学生を毎回診察の際に担当します。内科分野の病気の

診断は情報が多く、教員からの一方向の説明では十分に理解できないことが多い。そこで、事前に症例情報をかみくみだいて説明し、診断や治療についてポイントなる点について課題を課し学んでいただくようにしています。また、症例検討ではディスカッションタイムを設け、学生から理解できなかった点について細かく説明することもあります。一部の学生については、積極的に新しい診断や治療のアプローチが提案され着実に成果が上がっていると感じています。今年度は、学生自身に一般の飼い主さまに医療面接を実施してもらい、診療業務の中での重要性を学んでいただきました。

ICT の教育への活用

医療面接実習では、これまで一部の学生では映像を記録したことがありますが、実習については「みるペット」というオンライン診療システムを利用し、遠隔で一般飼い主さまより指導を受ける機会を設けました。学生が興味を持ち聴講中も集中できるよう、図やイラストを多めに活用し聴講後に小テストを設け学んだことの理解度をすぐに学生が把握できるようにしています。小動物臨床実習では、学理を活用し映像で「血球当てクイズ」を行い、受講生からは大変好評でした。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）

A: 授業、実習では可能なものはアクティブ・ラーニングと ICT 教育を実践している。今後、さらにブラッシュアップしてゆきたい。

②学生の理解度の把握（A～C）

A: 学生に小テストを課し理解度を評価している。

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

A: グループ学習では、グループごとに課題を出すなどしている。また、他の講義でも課題を出すなどしている。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

A: メールではありますがほぼすべて対応しています。

⑤双方向授業への工夫（A～C）

A: 講義では学理、メールで質問を受け付け回答しています。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

A: 国家試験においては問題の出題傾向を見て、予想される分野の説明と例題を示しました。十分かと認識していますが、さらに創意工夫したいと思います。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)
上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

獣医内科学では、日頃の学習態度を最終成績に反映させてほしいという要望が複数ありましたので、毎回講義の終わりに小テストを実施することにしました。

② ①の結果はどうか。

小テストを実施し、成績評価を行った結果定期試験の結果も良くなり受講者全員が合格し学習効果は向上したと思います。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

小テストは、今後続けてゆきたいと考えています。通常の定期試験で実施してこれまでとの結果を比較したいと思います。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

学生も従来に比べ、限られた時間で多くの内容を学ぶ必要に迫られています。オンデマンドのオンライン講義は、通学の時間を学習に振り分けられ、かつ繰り返し聞けるため、学生からは本当に良かったという声が多いです。講義の多い4年生以上の学生にとっては、有効な教育手法ですのでコロナ感染が落ち着いた後も継続することが望ましいと考えています。また、講義の最後に学習のポイントを述べておくようにしています。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

講義のポイントを明確にすることは、学生からは学ぶ上でやりやすいと高評価でした。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

FD 研究会はほぼ毎回参加しています。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

目標として今後も診療の実習では例えば今後普及すると思われるオンライン診察などを実習に活用することを進めてゆきたいと思います。特に、コミュニケーションの実習である医療面接実習については自分の行為と相手の受け止め方にズレが生じた場合、どのようにしたら埋められるか主体的に考えていただくような教育システムを目指したいと思います。現在、コミュニケーションに関する NDK 研究会に所属し情報収集と教育方法の向上について取り組んでおり、今後講義や実習に生かしたいと思います。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

- ・シラバス
- ・授業評価

*A4 4枚程度（A4 1枚(目安 1行40文字×36行1440文字)

●FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施

有 無

該当を○で囲む